

新しく生まれた、市民のための映像祭「市民がつくるTVF」プレ・イベント

## 「ビデオ大賞」3作品発表

特定非営利活動法人 市民がつくるTVFは、全国33都道府県から159作品が寄せられ、審査委員(下記)による厳正な審査の結果、このたび入賞15作品の中から「ビデオ大賞」3作品を決定しました。3作品はそれぞれが今回の象徴としての特色をもっており、異なった作品分野から選ばれています。なお、受賞者には賞状と記念の陶器製トロフィー(佐藤均制作)が贈られます。またビデオ大賞を除く、入賞12作品は「優秀作品賞」として賞状と陶器製の盾が贈られます。

## &lt;ビデオ大賞・受賞作品&gt;

| 作品名     | 作者名   | 年齢  | 職業 | 都道府県 | 作品分野     | 作品時間   |
|---------|-------|-----|----|------|----------|--------|
| 四世代を生きる | 藤井 喜郎 | 71歳 | 無職 | 神奈川県 | ドキュメンタリー | 16分14秒 |



## 【作品概要】

田舎に住む義母を丁寧に撮り続けた作品。自家栽培の野菜料理を帰省した家族たちに振る舞い、地域の行事、趣味などを楽しんでいた母も高齢化し、一人暮らしが困難になってくる。都会に住む現況を含めて、高齢化した日本が見える。

## 【講評】

現在90歳、20年前から冬だけ子供たちの家を転々、とうとう都会の長男宅に移住。長くは続かず、老人ホームへ。他人事ではない。見ながらあれこれ思いを馳せざるをえない。何年にもわたり、しっかり撮った見事な映像。ゲートボール、日常仕事、家族の節目の会、集落行事、別れ、ホームにて。どの絵にもおばあちゃんがちゃんと生きている。(高畑 勲)

|                |       |     |     |     |          |     |
|----------------|-------|-----|-----|-----|----------|-----|
| Jack in Harlem | 佐藤 公昭 | 37歳 | 会社員 | 東京都 | ドキュメンタリー | 20分 |
|----------------|-------|-----|-----|-----|----------|-----|



## 【作品概要】

ハーレムで出会ったジャックとその家族。何気ない日常を通して浮かび上がってくる閉鎖的な社会環境。ドミニカ人のプライドを持つ純真な少年も成長するにつれ、犯罪に染まる可能性を秘めている。ジャーナリストとは違った作者の浮遊感が異色。

## 【講評】

いつ、何処で、誰が、何をしたといった情報があいまいだからか、不思議な感覚で溢れていて、ニューヨークのハーレムの中で迷子になった気分だ。ジャックが閉ざされたコミュニティの中で、大人に成長しつつ次第に呼吸困難になっている空気感に共感した。ジャックと作者の密着と信頼が魅力となっている。(小林はくどう)

|          |             |     |    |     |       |       |
|----------|-------------|-----|----|-----|-------|-------|
| コラージュージュ | 高田 涼平/三好 萌加 | 19歳 | 学生 | 京都府 | 創作アート | 7分10秒 |
|----------|-------------|-----|----|-----|-------|-------|



## 【作品概要】

このコマ撮りアニメのようにパソコンの表現が手軽に可能となった。実写からプリントを起こし、切り張りして実写と合成するなどである。モチーフは女の子のポートレートだが、工夫と創意に満ちて楽しんで制作していて、若者の感性が溢れている。

## 【講評】

「きらめく流星群が、柔らかい宇宙の風に吹かれて、通りすぎていった」

これが、僕の心に残る『コラージュージュ』の思い出です。

切り抜きの巧みなコラージュかと思うと、その中から不思議に動き出す「恋人かしら」?それが又、いつのまにか消えていく。嬉しいような、淋しいような…。(羽仁 進)

## ■ 市民がつくるTVF プレ・イベントについて

「市民がつくるTVF」プレ・イベントは、31年間継続開催してきた国際的なビデオの祭典「東京ビデオフェスティバル」(TVF/日本ビクター主催)の精神を継承し、市民の有志で新しく運営する市民映像祭で、本格的に開催する2010年を前に国内限定(日本在住者に限る)で開催するものです。

## ■ 審査委員(6名)(五十音順/敬称略)

・大林宣彦(映画作家)・小林はくどう(ビデオ作家、成安造形大学教授)・佐藤博昭(ビデオ作家、日本工学院専門学校講師)・椎名 誠(作家)・高畑 勲(アニメーション映画監督)・羽仁 進(映画監督)

(本件に関するお問い合わせは下記にお願いします)

特定非営利活動法人 市民がつくるTVF 事務局長 牛頭 進(ごず すすむ)

〒113-0034 東京都文京区湯島1-2-5 オフィスムーンビル2階

TEL 03-6206-8655 FAX 03-6206-8656

URL: <http://tvf2010.org/>

■ 市民がつくるTVF プレイベント (2010年1月30日発表)

「ビデオ大賞」受賞作品 (3作品)

| NO | 作品名            | 作者            | 年齢 | 作品時間   | 都道府県 |
|----|----------------|---------------|----|--------|------|
| 1  | 四世代を生きる        | 藤井 喜郎         | 71 | 16分14秒 | 神奈川県 |
| 2  | Jack in Harlem | 佐藤 公昭         | 37 | 20分    | 東京都  |
| 3  | コラージュージュ       | 高田 涼平 / 三好 萌加 | 19 | 7分10秒  | 京都府  |

「優秀作品賞」受賞作品 (12作品)

| NO | 作品名                      | 作者                                  | 年齢 | 作品時間   | 都道府県 |
|----|--------------------------|-------------------------------------|----|--------|------|
| 1  | 国労バッジはずせない！<br>ー辻井義春の闘いー | 湯本 雅典                               | 55 | 19分54秒 | 東京都  |
| 2  | アザラシに揺れる村                | 稚内北星学園大学<br>(代表 牧野 竜二)              | —  | 16分32秒 | 北海道  |
| 3  | the Reverberation        | 高木 臣太郎                              | 22 | 16分43秒 | 滋賀県  |
| 4  | マロくんありがとう                | 小田 忠男                               | 65 | 19分42秒 | 山口県  |
| 5  | W.C. (water circulator)  | わにたこす (金川 貴子)                       | 35 | 12分25秒 | 滋賀県  |
| 6  | SHODAN～障害者ボランティア集団～      | おおさか行動する障害者<br>応援センター<br>(代表 梅田 純平) | —  | 10分6秒  | 大阪府  |
| 7  | うまい野菜を食べよう！              | 板橋区立志村第二中学校<br>総合科学部<br>(代表 奥山 彩音)  | —  | 11分40秒 | 東京都  |
| 8  | 土俵                       | 平野 隆弘                               | 71 | 9分56秒  | 埼玉県  |
| 9  | 何時か家族に                   | 吉野 和彦                               | 48 | 18分47秒 | 長野県  |
| 10 | 引き裂かれた私たちの歌              | 長野県松本筑摩高等学校 放送部<br>(代表 小池 優理子)      | —  | 16分10秒 | 長野県  |
| 11 | 栄子～70歳～                  | 大井 貴之                               | 38 | 3分     | 北海道  |
| 12 | 俳句の中の蛙たち                 | 姫路市立菅野中学校<br>生物・理科研究班               | —  | 2分54秒  | 兵庫県  |

※なお、本賞(入賞15作品)とは別に、市民目線で制作された優れた24作品を「市民賞」として選定し、NPO法人市民がつくるTVFより賞状を贈ります。市民賞受賞の24作品につきましては、作品名、作者の一覧をNPO法人市民がつくるTVFホームページに掲載します。

## ■ 市民がつくるTVF プレイベント

### 【審査委員総評】

#### 作品が人を創る時代ともなって来た。

大林宣彦（映画作家）

我輩は猫である、と猫が歩いて見たものまでが画像となる時代である。かるいやゆるいが現代を表現するなら、『Jack in Harlem』はまことに現在の映像風景だ。選良による強い祈りや怒りが捉えたかつてのドキュメントとは異なる日常感覚が映し出したものを見る体験は新鮮であり、同時にまた新しい時代の表現者の覚悟と見識のありようが問われる場合でもあろう。見るも楽しい『コラージュルージュ』も現代が生んだ映像表現の才であり、一見古典的な『四世代を生きる』にも熟成した日常の空気感が忍んで、記録が人生の記憶ともなり得る優しさを醸造する。人は作品を作るが、現代では作品もまた人を創る。子供たちの作品創りはそこに豊かさを見るべきであり、またその逆転を矛盾と認識し、演繹と帰納の狭間にこそ現代のリアリティを弄ろうとする『W.C.(water circulator)』、『何時か家族に』、『マロくんありがとう』の混沌、また時代の遊戯性を取り込もうとする『SHODAN～障害者ボランティア集団～』、『栄子～70歳～』が提示する現象を、今回はしかと見つめてみた。

#### ジャンルを超えるTVF

小林はくどう（ビデオ作家・成安造形大学教授）

2009年春、31回続いた日本ビクター主催のTVFが景気悪化の風を受けて突然に終了した。常連のビデオ愛好家たちは目標を失い、腑抜けな生活を送っているとのこと。「お金も副賞も要らないからまた始めて欲しい」こうした声に励まされて昨年（2009年）6月NPO法人で継続を踏ることになった。新TVFではビデオ作家を育てたいと考えている。個展や出版などもサポートしていきたい。今年の特徴としては家族をモチーフにしたものに佳作が多かった。家族の背後に自分や社会が垣間見える。また21世紀の時代の変容する社会問題をしっかりと捉えようとするビデオジャーナリズムも健在である。

今回興味深かったのは『俳句の中の蛙たち』のように子供たちが俳句の文系と蛙の理系がビデオで合体する研究の発想が登場したことである。応用としてとしてトンボと歌が結びつくように、ジャンルを横断するようなテーマがいろいろ出現するのではないか楽しみにしている。当初予定していなかったが、水準が高いため、落選した作品群から励ましの意味で、「市民賞」を24点選んだことを報告します。

#### 市民ビデオの大きな一歩

佐藤 博昭（ビデオ作家・日本工学院専門学校講師）

TVFが「市民がつくるTVF」へと大きな一歩を踏み出そうとしている。その節目に、運営組織の一員として、また、審査委員として参加出来ることを誇りに思う。もちろん簡単に踏み出せるものではなかった。関係した全ての人達の美しい志が、少しずつ形になろうとしている。スケールだけを見れば、むしろ小さな一歩かもしれない。今回集まった159作品は「市民がつくる」にふさわしい力作揃いであった。これまでの入賞者が、共にこのスタートラインに立ってくれたこともうれしかった。

入賞した15作品は、それぞれの地域で何かの問題と向き合う、逞しい市民映像作家達の眼差しが記録されていた。あるいは、手間の掛かる独創的な作業を積み重ねた、新しい表現があった。中学生や高校生が力強いメッセージ発信を続けてくれている。審査会を白熱させた問題作もあった。

終わらせてはいけないのだと、あらためて思う。ここからは、皆さんと一緒にTVFを作っていきましょう。

## 求ム 危険な作品

椎名 誠（作家）

あたらしい TVF のスタートを素晴らしく思う。もしかすると世界規模のスケールで積み重ねてきたこれまでの TVF は偉大な助走期間であったのかもしれない、と思えるような理想的な構造と思想の確立を感じる。

その息吹に応え、新生 TVF の選考委員をおよぼさずながらもまたもや務めさせていただくことになった。しかし以前より少なくなった最終選考の対象作品は、初回の緊張、あるいは意気込みの空転か、私には少々もの足りなかった。最終候補作品はどれもテーマもモチベーションもしっかりしていたが、“新生”ということ私を私のほうが過剰に意識しすぎてしまったためか、どれもこれまでの類型を突破できなかったように思えたからだ。

では、どのようなものを期待しているのか。それはヒトコトで言うと、他のメディアでは絶対見ることができないような、個人の作家だからこそ出来る、強引で攻撃的な意思のある作品がほしかった。見るものの息がつまるような“危険な作品”を次回以降期待したい。

## TVFらしさを喜ぶ

高畑 勲（アニメーション映画監督）

今回の入賞作を見て、TVF の栄えある伝統とその精神が「市民がつくる TVF」へと着実に受け継がれていくことを確信した。社会や家族をめぐるドキュメントは、それぞれが固有の優れた特徴をもつ。中でも『四世代を生きる』は傑作だ。『SHODAN～障害者ボランティア集団～』は、企画の相談から、内容の検討、演技、撮影まで、作り上げていく過程をも含み込ませたなら、すごい作品になったのでは、と思わせた。『引き裂かれた私たちの歌』は面白いけれど、先生をへこますだけでなく、音楽教育がどうあるべきか、ともに模索する道を探ってほしかった。『Jack in Harlem』は行きずりの旅行者がなんとなく断片的に撮ったようでいて、撮り手に気を許す関係がまわりに拡がり、少年とその家族、そしてそれが属する小コミュニティの姿をいつの間にかこちらの脳裏に思い描かせた。『コラージュルージュ』はけっこう手のこんだ映像なのに、心地よく人を楽しませる力量が見事。

## ビデオを作る人々の熱い思い —プライベートの作品群を拝見して— 羽仁 進（映画監督）

わずかな間に、これだけの作品を集められたのは、素晴らしい事だと感じました。小林はくどうさんはじめ NPO の中心となられた方々、事務局を背負って奮闘された牛頭さんの努力、凄いと感服する他ありません。

昨年、輝かしい最終回を迎えた「TVF」と、この努力が生み出しつつある「市民がつくる TVF」。二つの間には、共通に流れているものもあり、違うものもある。そのことを実感しながら、僕という一人の人間に、どんなお手伝いが出来るのか、一生懸命、考えている途中だと、自分では思っています。

とにかく、みごとなスタートを切った「市民がつくる TVF」万歳。そこから本当に新しい何かが生まれることを祈りつつ熱い拍手をおくる気持ちです。